夏短編集２０２１　―サンプル―

①人体改造博物館（諏訪×千尋）

『夏風邪』

「あっ、あっ」
気持ちいい。お客さんが亀頭をローションべったりのガーゼで擦っている。
「ああっ！」
もうイってしまいそう。でもまだ仕事の時間は一時間以上残っている。今イったらあとがつらい。
「ああっ！」
『ああ、本当にかわいらしい亀頭だ。四肢がなくて逃げられないというのもかわいいね』
『ありがとうございます』
想像する会話。大好きな人が、千尋の陰部を褒める男に礼を言っている。
「ああっ……」
いやらしい。本当なら諏訪にだけ見せ、触れてもらうはずの場所。そんな大切なところを見ず知らずの人に紹介され、触れるように勧められてしまっている。
『ん？　ぴくぴくしてるな』
『はい。手足に力を入れて快感を逃がすことができないので、腹筋やアナルに力が入るんです』
『そうか。亀頭を擦られるのが好きなんだね』
――なんて会話をしているのだろう。想像するだけで体が熱くなっていく。でもきっと千尋の頭の中だけでなく、この壁の奥では本当にそんなことを言っているのだ。

「ちーくん、お疲れ様」
「ぁ……」
喉が痛い。声がかすれてはっきりと出せない。
「飲み物を飲もうね」
諏訪がマグを取り出した。口を開けると首の後ろに腕が入れられ、ゆるく体を起こされる。付属のストローを咥えさせてもらい、ちゅうっと吸う。
「んく……」
ほどよく冷えたスポーツドリンクが体にスッと入っていく。気持ちいい。おいしい。でも少し喉に沁みる。
「ゆっくりね」

「ん……」
体を支えるのは重いだろうに、急かさないところが諏訪のいいところだなぁと思う。それに心地いい。でもいつまでもここで甘えているわけにはいかない。舌でストローを押し出し、礼を伝える。
「ありがとうございます」
「もういいの？　あ、でも声は出るようになったね」
「はい」
喉が痛いということは言わずにおいた。だって原因は喘ぎすぎだから。諏訪以外の手によって喉が痛むほど喘いだなんて、言いにくい。
「じゃあ支度するから少し待ってて」
体に柔らかい毛布が掛けられる。この感触を味わうと、無事に仕事を終えられたのだとホッとする。
（今日も疲れたなぁ……）
ただ寝転んでいるだけ。それでも強制的に刺激を与えられ続けると疲れてしまう。
（でも僕より匠さんの方が疲れてるんだし）
疲れた顔は見せたくない。職場でも家でも、諏訪はずっと動きっぱなしなのだ。常に千尋の様子に気を配り、夜中でも体が痛くならないよう数時間おきに体を動かしてくれている。
（うう……でも眠い……）
なんだか今日はやけに眠い。二回もイってしまったからだろうか。
（あ……だめ……）
でも手がないので目を擦ることも、眠気覚ましのツボを押すこともできない。抗う術が一つもない。
「ん……」
ダメなのに――そう思いながら、眠りに落ちた。

「あ……」
目が覚めたら自宅のベッドにいた。目を擦る代わりに首を振って意識を保つ。そのしぐさで、ヘッドボードに寄りかかりながら本を読んでいた諏訪が千尋の目覚めに気付いた。
「あ、起きたね。大丈夫？　具合悪い？」
「いえ、大丈夫です。すみません、寝ちゃって」
話すとまだ喉が痛んだ。風邪だろうか。普段なら少し時間が経てば痛みなんてひいたのに。
「具合が悪くないならよかった。ちーくん、シャワー浴びても寝てたから」
「え」
まさかそんなに眠りこけていたとは。
（そんなに疲れてたのかなぁ……）
「気温も上がってきたし、ちょっと疲れが出てるのかも」

②涙の音

『夏休みの過ごし方』

【夏休み、行きたいところはあるか】

八月の始め。

健から届いた一通のメッセージは、意味がよくわからなかった。

（お兄ちゃん、僕がまだ中学生だと思ってるのかな？）

しかし卒業式の日に迎えに来てくれたし、ずっと学校にも行っていない――それとも社会人にも夏休みがあるのだろうか。

でもそんなことを訊いて常識がないと思われたら――。

「ごちそうさま」

少しずつ健と始めた料理の勉強。火を使うのはまだダメだと言われているけれど、健が買ってくれた電子レンジ調理のレシピ本で、少しずつご飯を作れるようになってきた。

手錠を外してもらえるようになったのは少し前。レシピ本を買ってもらったことも、それを二人で見ながら料理をするのも、そしてそれを一緒に食べるのも、全部がとても嬉しくて、文章を暗記しそうなくらいずうっと眺めていたら、健が帰ってきたことにもまったく気が付かないことがあって。それくらい好きなら、と、外してくれるようになったのだ。でもだからこそ、外には絶対に出ない。必要なものがあっても今あるもので作れるようなものを考える。少しずつ、そういうことができるようになってきた。

「うまかった」

「よかった」

料理はすごく好きだと思う。硬い野菜を切るときは手を切りそうで怖いけれど、退屈もしないし、何より健がおいしそうに食べてくれることが嬉しい。健は仕事で疲れているし、毎食お弁当ではお金もかかりすぎると思っていたから。

「ところで今日、メール、見たか」

「夏休みの話ですか」

唇の動きで言葉を読むのも、前よりだいぶできるようになってきた。

「届いてたのか」

「返信しなくてごめんなさい。夏休みがよくわからなくて」

そう答えると、健は少し不思議そうな表情をした。しかし数秒後、合点したように頷く。

「お盆休み」

「え？」

わからなかった。首をかしげると、健が携帯に文字を打ち込む。

【お盆休み】

「お盆休み？」

【そう。八月の半ば、毎年五日間ぐらい休みになる。今年は土日につながるから一週間休み】

「一週間も！」

そんなにお休みがあるなんて。ゴールデンウィークも長かったけれど、またあれぐらい一緒にいられると思うと嬉しい。

（一週間も休みっていうことは……）

頭の中で思考を巡らせる。

最初の三日はたくさん寝て、やりたいことをして体の疲れを取ってほしい。次の二日は一緒にご飯を作って食べられたら……あと、少し遊んでもらえたら嬉しい。残りの二日はこれからまた毎日仕事が始まるから、その分も体を休めておいてほしい。

（たくさん一緒にいられる！）

健が家にいてくれるなら、それだけでいい。寝て過ごすだけでもじゅうぶんだ。

楽しみだなぁと考えていると、顔の前で手を振られた。

「あ、はい！」

「行きたいところは、見つけたか」

「行きたいところですか」

「せっかくの、休みだからな」

それはどこかに連れて行ってくれるということだろうか。でもそんなことをしたら疲れさせてしまうし、健の疲れが取れないだろう。

「どこもないです。お兄ちゃんはありますか」

③キス・イン・ザ・ダーク

『雷』

二人揃っての休日。

ここのところ三崎がとても忙しそうだったので、こうしてゆっくりできるのは久しぶりだ。

でも楽しい時間はあっという間に過ぎるもので、すでに時刻は十八時半。そろそろお風呂に入って寝る支度をしなければならない。でも三崎の隣に座っていると心地よくて、ついうとうとしてしまう。

「輝」

「んー……」

「おねむか」

「んぅ……」

おねむ、なんて子どもみたいな言い方。でもお風呂の前に眠くなってうとうとしてしまうなんて、本当に子どもみたいだ。

「ベッドに行くか？」
「お風呂……」
もう眠い。でもこういうとき、幸せだなぁと思う。一人暮らしだったらずっと気を張っていて、なかなかうとうとすることだってできなかった。変な時間に寝てしまうと体内時計が狂ってしまうし、シャワーだって面倒になってしまって、注意力が散漫になり、転びやすくなったりして。
でも今は安心してウトウトできる。しっかりしなきゃとわかってはいるけれど、つい甘えたくて。甘えさせてもらえているこの環境の居心地がよすぎて。
「じゃあ一緒に入るか」
「一緒？　入るってどこですか？」
ぼうっとしながら訊くと、三崎が笑った。
「風呂だよ。シャワーを浴びるんだろう？」
そうだった。そんな話をしていたんだった。
「寝ててもいいぞ。入れてやるから」
「んー……」
でも三崎も疲れているし、そこまで甘えてしまうわけにはいかない。だから、「起きます」と言って姿勢を正そうとしたときだった。突然大きな音が聞こえ、部屋が揺れた。
バリバリバリッ！
「っ……！」
一気に目が覚めた。何が起きたのだろう。地震……ではない。少し揺れたような気がしたけれど、そういう揺れではなかったように思う。
「輝、大丈夫か」
体が勝手に丸まっていた。覆いかぶさるような体温を感じる。
「輝、雷だ」
「雷……？」
「さっきから光ってた。言っておけばよかったな。すまない」

④ちゃんとした恋

『プールサイド』

「未来くん、次の撮影なんだけど」
今日はお休み。お昼ご飯を食べ終えて、ソファで隣合って座り、手をつないでテレビを見ながら、時折衝動に駆られるようにキスをして……少しずつえっちな気持ちになってきたなというときに切り出された言葉。
「はい」

ドキドキする。仕事の話をする監督はかっこいいし、いやらしい。どっちの監督も大好きで――。

「この間撮った子どもの未来くんがすごく人気があってね」

「公園のやつですか」

尋ねると、監督が頷いた。

「子どもみたいでかわいいからもっと見たいってリクエストが殺到したんだよ」

恥ずかしい。だってそれは、みんなが未来の体を見たということだ。未来が公園でいやらしい遊びをしているところをたくさんの人が見た。きっとペニスを触りながら見た人も多いだろう。

「それでね、もうすぐ夏だからプール遊びしているところを撮りたいなと思って」

「プール遊び、ですか」

「そう。お外で、ビニールプールでね。私有地で誰の目もないからって水着も着ずに裸んぼで遊ぶんだよ」

想像したらペニスが軽く立ち上がった。慌ててそこに手をやってしまって、監督が笑う。

「おちんちん起っちゃった？」

「はい……」

「違うでしょう」

「……おちんちん、おっきした」

恥ずかしいけれど、監督に子どものように甘えるのは大好き。

「でも子どもは外で裸で遊ぶと言われても、おちんちんおっきしないよ？」

そうだ。そのとおりだ。

「ごめんなさい……僕えっちな子どもで」

「うん、かわいい。俺は未来くんがえっちな子ってちゃんとわかってるよ。でもね、撮影ではおちんちん最初からおっきはさせられないから、今のうちにお外のプール遊びに慣れておこうと思って」

思わず熱いため息が漏れた。だってそれは練習するという意味だ。大好きな監督と二人でお外でプール遊び。きっと興奮してたくさんペニスが起ってしまって、注意をされて――それで、どうなるのだろう。どんなえっちなことをされるのだろう。

「だから近々それを練習しようと思うんだけど、どうかな」

「嬉しいです」

仕事は仕事だけれど、これは半分プライベートのようなものだ。たくさん監督に甘えたいし、いやらしいこともしてほしい。

「じゃあ予約を取っておくね。いつがいいかな？　予定はある？」

一緒に住んでいて、仕事はＡＶ男優だけ。監督が仕事でいないときは家事をしているとわかっているはずなのに……それでもちゃんと訊いてくれるところが対等に扱ってもらっているみたいで嬉しい。

「ありません。いつでも……でも早い方がいいです」

「どうして？」
「だって……」
勝手に足がもじもじと動いた。膝を擦り合わせるようにしてペニスから意識をそらす。
「だって……早くプールでえっちな遊びしたいから……」
「えっちな遊び？　違うよ、プールで水遊びをするだけだよ」
水遊びだけと言いながら、本当はたくさんいやらしいことをするのに。
「うん、水遊びしたい！　暑いから」
「そうだね。じゃあ明日予約が取れるようなら取っておくよ」
「うん！」

木々に囲まれた山の中。さんさんと照りつける太陽。けれどプールとその隣のテーブルには、大きなタープによって日陰が作られていた。
「カメラテストってわけじゃないけど撮影してもいい？」
監督が荷物をテーブルに置いた。
「はい」
こうして監督に撮ってもらえるなんてとても贅沢。だってとても人気のある監督で、いろんな人が監督に撮ってほしいと思っている。でも監督は未来の撮影を軸に仕事を受けているので、他の人を撮ることはほとんどない。なのに未来はこうしてプライベートでも撮ってもらえる。しかもそれを、監督にたくさん、何度でも観てもらえる。
「男優さんはまだ決まらないんだけど、優しい人にするからね」
「はい」
監督がカメラを三脚にセットした。角度を調整し、タープの下にいる未来のところに歩いてくる。
「お洋服を脱ぐところから撮るよ」
「はい、よろしくお願いします」
緊張する。ドキドキする。撮影に入ってしまえば興奮と快感で緊張なんてどこかにいってしまうのだけれど、最初だけはどうしても……でも今は監督が近くにいる。仕事のときのように、遠くから見ているだけではない。
顔を見上げると、優しい顔でキスをされた。
「ン……」
柔らかい唇。そっと食まれると、うっとりしてしまう。
「監督……」
「未来くん」
ミクじゃなかった。未来って呼ばれた。やっぱり今はプライベートだと思っていいということだろう。
「楽しく遊ぼうね」
「はい……あ、うん！」

子どもを意識して笑うと、緊張が一気に解けた。そしてそれと同時に監督に甘えたいという欲がむくむくと膨れ上がって、弾ける。
「いっぱい遊びたい！」
「うん、たくさん遊ぼうね。はい、ばんざい」
両手を上げると、Tシャツを脱がされた。それからズボンと下着をゆっくりと脱がされる。これでもう、全裸になった。広い自然の中で、未来だけが肌をさらしている。
「おちんちん、おっきしちゃったね」
「……わかんない」
そっぽを向いて言うと監督が笑う。
「こっちも期待してるんだね」
よくわからないフリでプールに入ってしまおうと足を踏み出したけれど、腕を掴まれ止められた。
「こらこら。まだだよ」
「え、なんでっ」
早く水に入りたいのに。それに監督にもめちゃくちゃに水をかけたい。それでちょっと怒られるのもいいかな、なんて――。
「まだ日焼け止めを塗ってないよ」
そんなのいいのに。でも変に焼けてしまうと撮影で困るのかもしれない。
「じゃあ早くして！」
早く早くと監督のシャツを掴むと笑われた。
「わかった、わかった。でも丁寧に塗るよ」
テーブルの上のカバンから取り出されたのはベビーと描かれたかわいらしいデザインの日焼け止め。もう残りが少ないのか、二本出される。
監督が手のひらに日焼け止めを取り出した。両手を擦り付けるようにして伸ばし、顔に塗られる。
「かわいい。不細工になってる」
どっちなのかわからない。でも口を開けると日焼け止めが入ってきてしまいそうで、訊けなくて。
「よし、じゃあ次は――」
もう一度手のひらに日焼け止めが補充され、今度は耳の裏、それから首、喉、鎖骨……そこでまた補充されて、胸、乳首――かなと思ったのに、その手は肩に流れた。
「やだっ！」
「うん？　どうしたの？」
乳首にして、とは子どもだったら言わないだろうと思った。だから子どものようにプールに入りたいフリをして「早く！」とねだる。
「でも日焼けは肌によくないからね、ほら我慢して。塗り終わったらたくさん遊べるから」
監督の手が滑らかに動く。なのにまた日焼け止めを補充されて、その時間が焦らされてい

るみたいで苦しくて。
指の隙間まで丁寧に塗られ、ようやく腕が肩の方に戻ってきた。これでやっと乳首をいじってもらえる……と、そう思ったのに。
「さあ、ばんざい」
「え……」
「脇も塗らないと」
「あ……」
普段から体はすべて見られている。でもそうやって脇を意識すると恥ずかしい。
「ほら、ばんざい」
そこに毛はほとんどない。少し前に、エイジプレイのためと言って脱毛を始めたからだ。
「あっ……」
「かわいい」
監督の手がそこを撫でる。なんだかとてもいやらしい。
「ふふ、えっちな顔になってるよ」
「あっ……ごめんなさい」
「いいよ。今は練習だからね。それにきっとまぁ……実際にはどんなに練習しても未来くんはえっちな顔になっちゃうと思うし」
「やだ……」
恥ずかしい。まるで淫乱みたい。
でもそういうところを監督は好いてくれている。それを考えると、心から嫌だとは思えない。
「早く……」
どちらにしても、今できることは子どもらしい態度を取ることだけだ。
「わかった、わかった。さあ、あっちを向いて」
（え……）
脇の次は乳首じゃないのか。早く乳首に塗ってほしいのに。

⑤幸せの家

『夏の帰省』

ヴヴヴヴヴ……ヴヴヴヴヴ……
「ああ、ごめんね、少し待ってね」
大好きな牧原の足の間。抱っこしてもらってゆらゆらしてもらって、たまにお腹をこちょこちょされて。キャッキャと遊んでいるときの悲しい音。でも牧原は爽から離れない。電話があっても何か必要なものを取りに行くようなことがない限り、そのままの姿勢で受けてく

れる。
「ああ、園からだよ」
通話を受ける前、牧原がそう言って画面を爽に向けた。こうして、すべてを明かしてくれるところが好き。
牧原は受話ボタンを押したあと、スピーカーにした。
「はい、牧原です」
『ご無沙汰しております』
久しぶりに聞く園長の声。
「園長先生、こんにちは」
『今、爽は――』
「一緒に聞いています」
自分の存在を確認されると不安になる。もしかしたら園長は爽に知られたくない話があったのかもしれない。腰を上げようとすると、お腹に回されていた牧原の腕に力が入った。
その腕を外そうと手をかけた直後、「よかった」という園長の声が聞こえてきた。
『爽、久しぶり』
「あ……お久しぶりです」
『元気？　今週末、夏祭りだからお誘いの電話』
（あ……そうか、もうそんな季節か……）
毎年していた夏祭り。楽しかった思い出が頭の中に思い出される。
『今年、爽は来園者だね。時間は十時から十四時だよ。よかったら遊びに来て』
ちらっと視線を牧原に向ける。爽は働いていないので、行けるかどうかは牧原次第。
牧原は爽の気持ちに気付いたのか、ほほ笑みながら頷いた。
「お邪魔します」
『楽しみにお待ちしています』
通話はすぐに終わった。わざわざこのために電話をくれたのかと思うと嬉しくなる。
「夏祭りか……どんなことをするんだろう」
牧原が携帯をテーブルに戻す。隠すようにポケットに入れないところが好き。それに牧原は携帯を使っていいよと言ってくれるから。
「焼きそばとかヨーヨーすくいとかそういうの」
「ああ、今年だけってわけじゃないんだ。本当に夏祭りって感じだね」
「うん」
懐かしい。準備はかなり大変だけど、みんな笑ってくれるし、卒園した子もよく保護者と遊びに来てくれた。
「爽の体調がよかったら行こうね」
「お仕事は？」
「私がいつもこうしてるの知ってるでしょう」
こうしてる、と言いながら、牧原は爽のお腹をぎゅっと抱いた。

牧原の仕事は株の取引だ。だからどこにも行かないでずっと一緒にいてくれる。動かしているお金が大きいのかどんと構えるタイプなのか、あまり取引をしているようには見えないけれど、夜中にふと目が覚めると携帯をいじっていることがあるので、たぶん日本ではないどこかの国の市場でやり取りをしているのだと思う。爽の目が覚めたことに気付いた牧原が画面を見せてくれたことがあったけれど、眠かったし、変な棒や数字が並んでいて意味がわからず……たぶんそのまま眠ってしまった。

「うん。……あ、ちーでる」

突然の尿意。以前は自分の排尿にすら気付かなかったのに、牧原に吸ってもらうようになってからは出る直前に時折気付けるようになった。

「吸おうか」牧原が目を細めた。

「んー……」

少し悩む。牧原に尿を吸ってもらうのは気持ちいいし愛されている実感が湧いて好きだけれど、今はまだ腕の中にいたい。

「んーん、このまま抱っこがいい。でもちー出るところオムツぎゅってして」

ちゃんとおねだりすると、牧原の手がそこを包むようにしてオムツを皮膚に押し当てた。オムツと尿道口の隙間がなくなり、だらだらとゆっくり漏れ出る尿が吸われていく。

「ちー、気持ちいい？」

「うん、気持ちいい」

オムツを押してくれているおかげで尿が陰嚢の方に流れてしまうことがない。それにやっぱり手の感触がすごく好き。

「かわいい」

「僕？」

「もちろん。私は爽がおしっこしているところがすごく好きだよ」

「うんちは？」

「もちろんかわいくて、すぐに襲いたくなってしまうな」

「えっち」

求められていると思うと嬉しくて、甘えたい欲がむくむくと大きくなってしまう。すでにこれ以上ないほど甘えているというのに。

「かわいい恋人のかわいい姿だからね」

牧原はそうやって笑うけれど、襲いたいというのが冗談だということはわかっていた。

ペニスがなく、上手に射精することができない爽はなかなか牧原を満足させることはできない。挿入して動いてもらえば射精してもらうことはできるけれど、牧原の心が満たされるような姿を見せることができないのだ。

けれど、牧原は一度も文句を言ったことがない。爽がイけなくても、牧原自身はちゃんと射精しようとする。爽が気にしないように。それで、射精のあとは爽の体に傷がないかを確認し、温かいタオルで清め、「とても気持ちよかったよ」「私は幸せ者だ」「愛してる」「もっとしたい」と、数えきれないほどのキスとともに伝えてくれる。

「えっちする？」
「爽はえっちしたい？」
牧原に挿入してもらうことは好き。でも本気で射精しようと思うと数時間――場合によっては　丸一日かかってしまうから。

約４万字です。
収録タイトルは表紙にある５作品です。
この中に、少しだけ商業作品のカップルが出てきます。
がっつりのR指定は「ちゃんとした恋」のみです。
よろしくお願いいたします！

夏短編集２０２１　―サンプル―

gooneone（ごーわんわん）
2021/7 / 27
メール:gooneonegooneone@gmail.com
pixiv：19591291
Twitter:@gooneone11
ちるちる:gooneone